

Treatment of Multisystem Inflammatory Syndrome in Children.

McArdle AJ, Vito O, Patel H, et al. N Engl J Med. 2021 ; 385 : 11-22.

川崎医療福祉大学医療福祉学部子ども医療福祉学科 特任教授

尾内一信

TAKE HOME MESSAGE : WEB上のSARS-CoV-2関連MIS-C症例報告を用いてIVIg単独か、IVIg+グルココルチコイド投与か、グルココルチコイド単独投与かで回復に差を示す所見は認められなかった。

研究実施場所 : WEB上のMIS-Cが疑われる症例に関する報告の臨床データと転帰データを用いた国際観察コホート研究。

研究方法 : 逆確率重み付け法と一般化線形モデルにより、一次治療における免疫グロブリン静注療法(IVIg)を基準として、IVIg+グルココルチコイド投与、グルココルチコイド単独投与とを比較評価した。評価した主要評価転帰は、①2日目以降の強心薬投与もしくは人工呼吸管理、または死亡の複合とし、②2日目までの重症度低下の2つである。副次的評価転帰は、治療の増強、臓器不全と炎症の重症度低下までの期間である。

SUMMARY 要旨 2020年6月~2021年2月に、MIS-Cが疑われた患児32カ国614例の治療経過に関するデータWEB上に公表されていた。614例のうち、246例が一次治療としてIVIg単独、208例がIVIg+グルココルチコイド投与、99例がグルココルチコイド単独投与を受け、22例は生物学的製剤などほかの薬剤の投与を併用または単独で受け、39例は免疫調節療法を受けていなかった。強心薬投与もしくは人工呼吸管理、または死亡は、IVIg+グルココルチコイド群の56例(IVIg単独と比較した調整オッズ比0.77, 95%信頼区間[CI]: 0.33~1.82)と、グルココルチコイド単独群の17例(調整オッズ比0.54, 95% CI: 0.22~1.33)に発生した。この2群の、IVIg単独群と比較した重症度低下の調整オッズ比は同程度であった(IVIg+グルココルチコイド群0.90, グルココルチコイド単独群0.93)。重症度低下までの期間も3群で同程度であった。したがって、IVIg単独か、IVIg+グルココルチコイド投与か、グルココルチコイド単独投与かで、MIS-Cからの回復に差があることを示す所見は認められなかった。

Post-13-Valent Pneumococcal Conjugate Vaccine Dynamics in Young Children of Serotypes Included in Candidate Extended-Spectrum Conjugate Vaccines.

Ben-Shimol S, Givon-Lavi N, Kotler L, et al. Emerg Infect Dis. 2021 ; 27 : 150-60.

千葉大学真菌医学研究センター感染症制御分野 教授

石和田稔彦

TAKE HOME MESSAGE : 新規開発中の20価肺炎球菌結合型ワクチンは、PCV13導入後の肺炎球菌による侵襲性感染症、呼吸器感染症、耐性菌感染症予防への有効性が期待できる。

研究実施場所 : イスラエル Soroka University Medical Center (SUMC) 1施設

研究方法 : SUMC小児感染症ユニットで実施されているいくつかの人口をベースにしたアクティブサーベイランス研究で収集された肺炎球菌株について血清型解析を行い、経時的な変化について比較検討を行った。

SUMMARY 要旨 10価および13価の肺炎球菌結合型ワクチン(PCV10/PCV13)が世界的に導入されたが、現在、20価PCV(PCV20)が開発されている。2歳未満の小児の保菌、結膜炎、中耳炎、侵襲性感染症(IPD)由来肺炎球菌株(合計9,089株)を対象に、PCV13非含有PCV20追加7血清型(VT20-13)とPCV20非含有血清型(non-VT20)の分離状況について、PCV13導入早期(2009~2011年)とPCV13導入後期(2015~2017年)で比較検討を行った。その結果、PCV13導入早期に比べ導入後期では、中耳炎、IPD、下気道感染症罹患小児からの保菌株において、VT20-13の割合が有意に増加していた。また、VT20-13はnon-VT20より抗菌薬非感受性株が多かった。呼吸器感染症とIPDにおいて、VT20-13が有意に増加していたことは、VT20-13はnon-VT20より潜在的な感染症発症リスクが高いことが推察された。

Neonatal SARS-CoV-2 Infections in Breastfeeding Mothers.

Shlomai NO, Kasirer Y, Strauss T, et al. Pediatrics. 2021 ; 147 : e2020010918.

国立がん研究センター中央病院感染症部 感染症部長/

医療安全管理部 感染制御室長

岩田 敏

TAKE HOME MESSAGE : COVID-19に感染した母親から出生した児への母乳栄養は、母親に対して適切な感染予防策のガイダンスを行うことで安全に行うことができる。

研究実施場所 : イスラエル 周産期センター 12施設。

研究方法 : SARS-CoV-2陽性の母親からの出生児を、分娩後退院までの間母親から隔離し、その間に感染予防策に関するガイダンスを母親に対して行った。出生児に対する鼻咽腔スワブを用いたSARS-CoV-2 PCR検査を、分娩24および48時間後、退院14~21日後に実施した。退院後の出生児の健康状態、母乳栄養の有無、家族内のSARS-CoV-2陽性者の有無につき、退院14~21日後に電話を用いて調査した。

SUMMARY 要旨 SARS-CoV-2陽性の母親からの出生児は分娩後母親から隔離した方が良いのか、母親に適切な感染予防策に関するガイダンスを行うことにより、安全に母乳栄養を行うことができるか、という点に焦点を当てた研究である。2020年3月~5月の3カ月間に73例のSARS-CoV-2陽性の母親が登録され、このうち53例の母親と55例の新生児(双胎児2組を含む)が本研究に参加した。分娩後のSARS-CoV-2 PCR検査で新生児全員が陰性であった。退院までの分娩後隔離期間に非滅菌搾母乳で育てられたのは、新生児の74.5%であった。新生児が退院するまでに母親が感染予防策の指導を受けていたのは、新生児の89%であった。世帯の40%で、SARS-CoV-2陽性の家族がほかにいた。新生児の85%が、退院後に母乳で育てられた。退院後にSARS-CoV-2 PCR検査を受けた新生児は60%で、全例が陰性であった。このような結果は、SARS-CoV-2陽性の母親を分娩後に新生児から隔離する必要がないことを示唆しているほか、感染予防策が守られていれば母乳栄養は安全であることを裏付けている。